

哲學研究

第三百四十一・二號

第二十九卷
第八・九冊

哲學論文集第四補遺

西田幾多郎

我々人間は歴史的世界から生れ、歴史的世界に於て働き、歴史的世界へ死に行く。或は人間は生物的世界から生れ、生物的世界へ死んで行くと云ふかも知れない。生物的身體的としては、その通りである。併し我々の自己は單に生物的身體的に生れるのではない。我々の自己は歴史的社會的に生れるのである、即ち歴史的體格的に生れるのである。生物的世界と云ふのは歴史的世界の外にあるのではない、否、物質的世界と云へども、歴史的世界の外にあるのではない。今日の量子力學が之を證すると思ふ。此の世界は創造的世界であり、我々の自己は創造的世界の創造的要素として生れるのである。理性と云ふのは、人間の主觀的作用ではなくして、歴史的世界の自己形成作用であるのである。民族と云ふのは、單に生物的なるものではない。歴史的世界の形成力でなければならぬ、歴史的世界の種でなければならぬ。それぞれに歴史的世界形成の使命を擔ふたものである。然

らざれば、民族とは云はれない。歴史的形成の意義を有つと云ふことは、一つの創造的世界の性質を有つことである。特殊即全體として、永遠なる價值創造者となる。かかる形態に於て、一つの民族社會が國家となるのである。此に國家と單なる民族社會との區別があるのである。而して國家的民族が道德の根源となるのである。何となれば、我々人間は創造的世界の創造的要素として生れるものなるが故である。唯一なる人格としての我々の自己の生命は、此にあるが故である（哲學論文集第四參照）。抽象的理性の當爲に従ふ所に、我々の自己があるのではない。人間は論理の機械ではない。又單なる恣意は自己ではない。そこには却つて我々の自己は自己を失ふのである。我々の自己は歴史的身體的に生れるのである。民族的主體なくして歴史的形成と云ふものはない。我々の自己は歴史的身體的に生れ、いつも作られて行くと共に作り行くものである。民族は歴史的世界の自己形成力として、我々

の自己を媒介とすることによつて、歴史的世界を形成し行くのである。そこに我々の自己は歴史的生命を有するのである。抽象論理の立場に於ては、何處までも全と個とは相反する。そこには闘争あるのみである。然らざれば、互に相利用するだけである。併し歴史の創造の立場に於ては、兩方向が即一でなければならぬ。相反する兩方向が一なければなる程、却つて大なる創造があると云ふことができる。かかる立場に於ては、階級闘争と云ふことも解消せられなければならない。歴史的世界創造に於て、兩者一とならなければならない。一つの工場も歴史的世界創造の生産場であるのである。單なる物質欲の生産場であつてはならない。かかる立場に於ては、縦の階級闘争と云ふものが解消せられると共に、横の民族闘争と云ふものも解消せられなければならない。單なる民族主義は民族利己主義に外ならない。これより出て来るものは、帝國主義と搾取主義とあるのみである。それぞれ文化を有つた民族は、それぞれに歴史的形成の使命を擔うたものである。各自獨立的なものが、一つとして結合する所に創造があるのである。個性とは多にして一なるものである。

此に民族とか國家とか云ふものと、價值とか文化とか云ふ

二

ものとの關係について一言して置きたい。私はニーチエの云ふ如く超人が價值を創造するものではなくして、國家的民族が價值を創造すると考へるものである。超人とは、その頂點である。ギリシヤの國家的民族なくしてソクラテスもプラトンも出て來ない。ドイツの國家的民族なくしてニーチエ自身が出て來ない。斯く云ふのは、國家が文化の爲の手段だと云ふのではない。正にその逆である。國家が價值の創造力だと云ふのである。國家とは單なる治安の機構ではない、又單なる力の團體ではない。さう云ふものは國家と云ふべきものではない。眞の國家とは歴史的形成の主體として、價值創造者でなければならぬ。價值とか文化とかと云ふものは、實在と遊離したものではない。それは歴史の創造力の内容でなければならぬ。作られて作るものの内容でなければならぬ。然らざれば、それは遊戯に過ぎない。國家價值とは創造價值である。故にそれは眞の道德的價值である。背後に宗教的なものを有つて居るのである。

歴史的世界は單に多なるものの結合として機械的世界ではない、單に一なるものの發展として單なる目的的世界、生物的世界でもない。世界は單に物質的でもなければ、單に生物的でもない。多と一との矛盾的自己同一として、作られたものから作るものへと動き行く世界である。それ自身によつて有り、それ自身によつて動く具體的世界は、斯くあるのである。かかる世界は自己自身の

内に自己を表現する、自己表現に於て自己を有つ。自己自身の内に自己を映すことによつて、自己を形作る。形相と質料との矛盾的自己同一として、形が形自身を限定する。形作られたことが直に又形作ることとなる。内在即超越、超越即内在として、何處までも作られたものから作るものへである。歴史的世界は何處までも自己自身の内に課題を有つ。そこに自己同一を有つのである。「現今の如く、歴史的發展の結果、横に並列的な民族が縦に立體的に、世界が一となるに至つて、此の如き歴史的世界の本質が深く意識せられねばならない。今日の問題は一國家一民族の問題ではない。」右の如くなるを以て、歴史的世界は自己の内に自己を形成する自己實現の焦點を有つ。歴史的世界には、自己自身を形成する自覺的世界が含まれて居るのである。これが國家と云ふものである。歴史的世界は、國家として自覺するのである。國家形成と云ふものを豫想せないで、歴史的世界と云ふものなく、歴史的世界と云ふものを前提とせないで、國家形成と云ふものはない。私が、民族が歴史的形成力として、一つの世界創造的に國家となると云ふのは、之に他ならない。自己自身に世界を實現した民族が國家であるのである。此故に歴史的世界は、單に所謂自然的に自己自身を形成

するのではない。それは歴史的自然的でなければならぬ。かかる意味に於て世界の自覺と云ふには、深淺の差あることは無論である。併し歴史的世界は絕對現在の自己限定として、その成立の根柢に於て國家形態的であり、生物的自然的世界は却つてその抽象的形態と云ふことができる。歴史的世界の自己形成、即ち歴史的生命そのものが、固、國家形態的なるが故に、歴史的世界は創造的であり、文化的であるのである。ヘーゲルの國家觀も此までに至つてゐない。故に單にイデア的である、眞に歴史的形成的でない。民族と云ふものは、固、歴史的形成の力であり、それが一つの世界として自己の世界性を自覺する時、そこに内在即超越超越即内在として宗教的である。宗教と云ふのは、固、個人的意識の事ではない。内在即超越超越即内在なる歴史的世界の矛盾的自己同一なる所に、宗教と云ふものがあるのである。故に歴史的世界は宗教的形態を以て始まるのである。歴史は神話から始まると云はれる。すべて原始社會が宗教的に始まるとは、社會學者の云ふ所である(Durkheim)。斯く云ふのは、歴史的社会が神祕的に生起すると云ふのではない、何等かの超越的作用によつて出現すると云ふのではない。歴史的社会とは、主體が環境を、環境が主體を形成し、主

體と環境との相互限定として、作られたものから作るものへと、何處までも形が形自身を形成する世界である。歴史的主體と云ふのは、民族に他ならない。私が宗教的と云ふのは、右の如き歴史的生命の形成作用を云ふのである。歴史的社會は所謂唯物論者の考へる如くに、單なる環境からではない。それは機械的にも、目的的にも、考へられるものではない。然らばと云つて、單に民族的にと云ふでもない。環境なくして、單に民族と云ふものがあるのではない。主體と環境との矛盾的自己同一的に作り、作られる歴史的社會の自己形成の形として、神話的なものが成立するのである。原始社會に於て、神話とは、今日我々が考へる如く、原始人の夢ではない。それは社會的生産形式であつたと云はれる、現實的な生活様式であつたのである。併し最初には幻想的であるが、何處までも作られたものから作るものへと、絶對現在の自己限定として、歴史的の世界が發展するに従つて、それが理性的となる、個性的となる。私は之を國家的となると云ふ。(民族的信仰に於ては、民族が主體的に自己自身を世界と考へる。國家形態に於ては、自己自身を絶對的世界の自己顯現と考へるのである)。理性的となると云ふことは特殊が自己自身の根源に返ることである。そ

れが眞に一般的となると云ふことである、そして個性的となることである。抽象論理學者は、特殊を否定することによつて一般的となると考へる。一般化と云ふことは、すべての特殊性を失つて單に一樣となることと考へて居る。併し具體的論理の立場に於ては、特殊が一般となると云ふことは、特殊即一般として、特殊が個を含むことである、個物的多を自己限定となすことによつて、自己自身が一般者となることである、創造的一般者となることである。特殊が自己自身の根源に返ると云ふことに外ならない。何となれば、實在的として特殊そのものの力と云ふのは、かかる一般者の自己限定としてに他ならないが故である。單なる特殊、單なる非合理は何物でもない。それは却つて何物についても云ひ得る如き無内容なる抽象的一般に過ぎないであらう。具體的論理の立場に於て否定を媒介すると云ふことは、いつも自己自身の根源に返ると云ふことでなければならぬ。此點を深く理解せられなければならない。ヘーゲルの論理も、尙眞に此に至つてゐない。眞の辯證法的一般者は創造的一般者でなければならない。

歴史的の世界と云ふのは、右に云つた如く、民族としての主體が環境を形成すると共に、逆に環境が主體を形成

し、主體と環境との相互限定として、作られたものから作るものへと自己自身を形成して行く。かかる世界は、形相と質料との矛盾的自己同一として、即ち一と多、全と個との矛盾的自己同一として、形が形自身を形成する世界である。それはその根柢に於て、何處までも時間的たると共に空間的、空間的たると共に時間的、動即靜、靜即動に、絶對現在の自己限定として永遠に自己自身を形成し行く創造的世界でなければならぬ。民族的主體が歴史的世界形成力として、絶對現在の自己限定の形を取つたものが國體である。それは、何處までも自己自身を形成する歴史的世界の自己形成の形である。普遍的民族と云ふものはない。民族と云ふものは、何等かの個性を有つたものでなければならぬ。主體と環境と相互限定として、作り作られる所に自己同一を有つと云ふことは、絶對現在の自己限定として個性を有つと云ふことでは、なければならぬ。單に動かさるもの、變ぜざるものには、個性と云ふものはない。單に動くもの、變ずるものにも、個性と云ふものはない。個性を有つと云ふには、過去未來を含む絶對現在の自己限定として、動いて動かさる何處までも自己自身を維持し、自己自身を形成する形でなければならぬ。これが個性と云ふものである。

故に民族が單なる生物的民族を越えて、一つの世界として自覺する時、即ち歴史的形成的なる時、それが個性的である。而して民族が斯く個性的となると云ふことは、それが歴史的形成的であり、歴史的使命を擔ふと云ふこととでなければならぬ。國體とはかかる國家の個性である。國家は國體を有し、國體を有するものが國家であるのである。單に特殊な民族の生命の上に國家の名を冠すべきではない。個性的に歴史的形成的なるもののみ、世界に對して、眞の國家として獨立權を要求し得るのである。單なる民族獨立に基礎を置く抽象的國家觀は、現代に於て考へ直さなければならぬ。斯く云ふのは、民族獨立を無視すると云ふのではない。すべての民族が歴史的形成的であるが、而も世界史的立場に於ては、民族と民族との間には、自ら形相と質料との關係がなければならぬ。歴史的世界進展の種々なる趨勢に従つて、或民族が形相となり、或民族が質料となるのである。或民族は質料的に自己自身の歴史的使命を有つと云ふことができる。併し何處までも形相から質料へと共に質料から形相へと、形が形自身を限定する。歴史的世界に於ては、質料は亦何處までも形相的でなければならぬ。かかる意味に於て、如何なる民族も國家性を有つて居るのである。

る。眞の國家は、他の民族に對して、共に自己自身を形成する歷史的世界の自己形成の立場に於て結合するのである。自己自身の中に世界を表現せざるもの、即ち道義的ならざるものは、國家ではない。單に排他的なる民族主義から出て來るものは、侵略主義と帝國主義との外にない。帝國主義とは民族利己主義の產物である。世界が作られたものより作るものへと自己形成的なる時、自ら職分的たるを免れない。すべての民族が單なる平等の立場に立つことはできない。併し或民族を質料的と云つても、質料的形相でなければならぬ（ライブニッツの第二質料の如く）。眞の國家主義から出るものは、世界的世界形成主義でなければならない。今後世界の趨勢はかかる方向へ進んで行くのであらう。各民族は此の如き歷史的世界形成に於て結合して行くのである、仕事に於て一となつて行くのである。

我々の自己の實踐的道德の根據は、推論式的論理の當爲にあるのではない。我々の自己は此の世界から生れ、此の世界に於て働き、此の世界へ死に行くのである。我々の自己が此の歷史的世界の唯一なる個物として絶對現在の世界を表現する、そこに絶對現在の世界の自己限定として無限なる當爲に接する、即ち歷史的世界自身の自

己形成に接するのである。此故に我々の自己は、創造的世界の創造的要素として歷史的世界を形成し行くのである。實踐と云ふことは、歷史的形成と云ふことでなければならない。歷史的形成には、世界の自己表現的形成として世界を表現すると云ふことが含まれてゐなければならない。此に我々の實踐的道德の根據があるのである。

單なる盲目的行動は實踐と云ふべきものではない。それは動物的本能と擇ぶ所がない。我々の自己と世界とは、所謂主觀客觀と云ふ如く知識的に對立するのではなく、作る作られるの作爲的關係、歷史的實踐的關係に立つて居るのである。實在的世界と云ふのは、作られたものから作るものへと、自己自身を形成し行く歷史的世界であり、歷史的身體的に我々の自己と云ふものがあるのである。身體と云ふものがなくして、自己と云ふものはない。我々の自己は、先づ生物的身體的である。作り作られる世界は、先づ生物的世界として自己自身を形成する。そこにも既に主體と環境との相互限定として、形が形自身を形成する世界である。併しそこでは、主體は單に環境に依存するのである。然るに歷史的世界は、何處までも環境が主體を、主體が環境を形成する世界であるのである。かかる意味に於て、何處までも自己自身を形成する

形を、私は歴史的身體と云ふ。かかる世界の形成要素として、歴史的主體的に即ち歴史的身體的に働く所に、我の自己と云ふものがあるのである。我々は歴史的身體的に、歴史的世界の唯一なる個物として、自己自身の存在を有つのである。作り作られると云ふことは、機械的でもない、目的でもない。自己が世界を映すことから働き、働くことから映す、行爲の直觀的に働くこと云ふことでなければならぬ。それは何處までも表現作用的でなければならぬ。表現作用的と云へば、人はすぐ藝術的と考へるか知らぬが、我々の歴史的行動はすべて表現作用的である。藝術はその特殊なる場合に過ぎない。所謂主觀客觀の對立、相互關係は、すべて此の立場から考へられねばならない。我々の自己が歴史の個物として、過去未來を包む絶對現在の世界を映す所に、意識的である。唯一なる個物として絶對現在の自己表現を表現し、表現することによつて働く、即ち自覺的に働く、思惟的身體的に働く。そこに我々の自己は、創造的世界の創造的要素であるのである。動物は單に全體として、歴史的身體的には本能的であるが、人間は個物的として歴史的身體的には思惟的である。我々の自己が創造的要素として絶對現在の自己表現を表現すると云ふ時、我々はそ

こに絶對者の無限なる自己表現に接するのである、云はば神の言葉に接するのである。我々が個人的に、人格的なればなる程、爾云ふことができる。此に我々の道德的當爲の根柢があるのである。道德的當爲の根柢は、單に客觀的に環境から基礎付けられるのではない、又單に主觀的に推論式的論理から基礎付けられるのではない。多と一との矛盾的自己同一として形が形自身を限定する所に、基礎付けられるのである。そこには主觀即客觀、客觀即主觀に、內在即超越、超越即內在に、矛盾的自己同一的に自己自身を限定する、我々の自己の行爲的直觀の形がなければならぬ。絶對現在の自己限定の形が見られるのである。これが我々の道德的行爲の規範形として國體と考へられるものである。私は嘗て「知識の客觀性について」といふ論文に於て、民族的社會が世界像を映すものとして、歴史的形成の主體となつた時、それを歴史的世界の直觀體と云つた。國體とは、かかる意味に於て我々の人格的自己の行爲的直觀の形と云ふことができる。何となれば、何處までも歴史の個として唯一的に、創造的なものが、眞に人格的であるが故である。誰の人格でもない、その故に誰の人格でもあり得る當爲の主體と云ふ如きものは、眞の人格ではない。單なる形式的

當爲は、却つて個人的人格を否定するものと云ふことができる。カントの「目的の王國」に於て、既に個物的、多が何處でも個物的多なることが、逆に全體的一が全體的一であるといふ我々の人格的自己の行爲の形式が言表はされて居ると考へることができる。そこには既に矛盾的自己同一として行爲的直觀的統一が豫想せられてゐるのである。併しそれは、創造的一般者の自己限定の抽象的形に過ぎない。具體的道德の規範形は國體と云はなければならぬ。

私は右に述べた如き意味に於て、道德と云ふものは、元來、具體的には、何處でも何の時代でも、國體的であつた、而して又何時まで爾あるべきであると思ふ。抽象的に、普遍的道德と云ふものがあつたのではない。啓蒙時代の道德觀と云つても、それは時代と民族（特にフランス民族の如き）に即したものであつた。形式的、普遍的道德を主張すること、そのことが一種の道德内容を有つて居るのである。然るに今日は歴史發展の結果、實に世界自覺の時代に入つた。何れの民族も、單に自己自身によつてのみ生きることができない。我々人間が眞に人間の生命の本質として歴史的使命を自覺すべき時が來たのである。正に道德と云ふものの本質が明にせらるべ

き時が來たのである。國家道德と云ふものと道德と云ふものと二つあるのではない。道德的となると云ふことは、人間がその歴史的根源に返ることである。そこに絶對者に接することである。單に抽象的人間となることではない。我々はいつも絶對者に面して居るのである。そこに我々は眞に理性的であるのである。理性的と云ふのは、嚮にも云つた如く自己の根源を離れることではない、何處までも此に入ることである。否、自己が絶對者のものとなることである。理性を否定する人は、此の如き理性の意義を誤解してゐるのである。而して斯く我々が自己の根源に入ると云ふことは、我々が一に結合することである。歴史的世界は、形が形自身を限定する世界である。そこには我々の生命は何處までも職分的でなければならぬ。各民族は立體的に結合するのである、萬邦その所を得るのである、眞の國家主義は、世界的世界形成主義を含んでゐなければならぬ。單なる民族的國家主義と云ふものは、民族闘争の立場を越えたものではない。そこからは聖戰と云ふ語は出て來ない。

國家の根柢に國家成立の神話を有ち、超越即內在、內在即超越的に、絶對現在の自己限定として歴史的生成的なる我國の歴史に於て、始めて國家即道德の國體と云ふ

ものが自覺せられたのである。嘗て「日本文化の問題」に於て云つた様に、我國の國體に於ては、皇室が世界の始であり終である。皇室が過去未來を包み、絶對現在の自己限定として、すべてが皇室を中心として生々發展すると云ふのが、我國體の精華であるのである。神代在今、莫謂往昔(舊事本)と云ふ。何處までも歴史的形成的として個即全、全即個である。萬民翼賛的である。天地非外、開闢在己(同上)と云ふ。今日多くの人は、我國體を家族的と云ふ。私も爾考へる。そこに我國體の美しさ強さがある。歴史あつて以來、一民族として、今日に至るまで家族的發展し來つた我國家の如き他に類例がない。併し私は又、我國の國體は單に家族的と云ふ以上のものであると考へるのである。神武天皇が皇祖皇宗を祭られたのは、單に家長として祖先を祭られたと云ふだけなので、はなからう。皇室を中心としての我國の肇國には、天地開闢即肇國として歴史的世界形成の意義があるのである。故に萬世一系、天壤無窮である。神國といふ信念の起る所以である。詔に現人神としての神の言葉を聞くと云ふことができる。そこに理性的に法と道德とが基礎付けられるのである。八紘爲宇の語も、そこから云はれねばならない。然らざれば、侵略主義とも誤解せられるでもあ

らう。人は又我國を生々主義と云ふ。私はそれにも反對するものではない。併しそれは、何處までも歴史的自然的に、歴史の生成の意義でなければならぬ(「傳統」參照)。今日の西洋諸國の國家と云ふものは、ローマの統一によつて、一度すべての民族の宗教的なるものが破壊せられて後、環境的に形成せられたものである。而してその宗教的要素はキリスト教から取入れた(如何なる國家にも宗教的要素がなければならぬのである)。中世の或時期に於ては、一時逆にキリスト教的一帝國の觀を呈した。そこには超越と内在とか、一と多とが對立的である、民族のかキリスト教のかである。國家理由としては、抽象的道德が取入れられなければならないかつた。超越即内在、内在即超越的に、民族的形成そのものの内に、自己超越的に世界史的的形成を見ると云ふ如き我國に於ての様な國家神聖觀は發展せなかつた。國家即道德なる國體觀が我が日本に於てのみ發展した所以である。嚴密に云へば、國體と云ふものは、我國の外にないとも云ひ得るのである。併しそれは我國體の單なる特殊性と云ふことではない。我々は今日單に我國體の特殊性を誇るのみならず、その世界史的深大性に著眼し、之を闡明すべきである。而して實踐に、理論に、之を世界に光被すべきである。何と

なれば、今日こそ世界自覺の時代なるが故である。歴史的世界形成の人間の行動の規範形として、正に國家と云ふものの本質が明にせらるべき時である。而して新なる世界秩序は之によつて構成せられるであらう。

我國體の獨自性と云ふのは、一言にて云へば、何處までも内在即超越、超越即内在と云ふにあるのである。（此故に絕對矛盾的自己同一）國家理由そのものを原理とした世界の自己形成として、その純なる國家性にあるのである。他の原理からは導かれない、國家學の基礎が、我國の國體概念に於て把握せられるのである。家族的と云ふことは、超越的なものが何處までも内在的と云ふことを示すものでなければならぬ。日本精神の極致は、現實即絕對にあるのである。

萬世一系の皇室と云ふことは、自己自身を形成する歴史的、世界成立の根柢として、日本國民には絕對的事實である。かかる立場に於て、物は皇室の物であり、事は皇室の事であり、すべてが「おほやけ」のものとして、我々は皇室中心的に、家族的と云ふことができる。併しそれは私的な意味に於て家族的と云ふことでなく、内在即超越として、歴史的世界形成的に、勝義に於て國家的と云ふことであるのである。

（附錄一、參照）。

歴史的世界は絕對現在の自己限定として、重要な三つの契機を含んで居ると思ふ（縦に直線的形成的として

道德的、横に圓環的直觀的として文化的、絕對現在そのものの自己限定として宗教的）。縦に時間的に何處までも形成的である、作られたものから作るものへである。

そこには歴史的世界は何處までも動的に國家形成的である。民族と云ふものは、歴史的形成的として既に國家性を含んだものである。之に反し何處までも現在が現在自身を限定する、永遠の現在の自己限定としては、空間的である。時を包むと考へられる。かかる自己限定の契機に於て、歴史的世界は時代的である。而してその自己限定の内容が文化と考へられるものである。それは超時間的である、イデア的である。そこに世界は、絕對現在として、自己自身の永遠なる内容を表現するのである。我の自己は、歴史的世界の個として國體的行爲する。

國體は我々の行爲の規範形である。併し我々の自己は作られて作るものとして、創造的世界の創造的要素として、行爲的直觀的にイデアを直觀する、永遠なる生命の顯現である。そこに文化的である。行爲的直觀的に世界そのものの内容を表現するのである。世界は、一面に何處までも自己形成的に、動的に、國家的である。かかる自己形成の社會的形態が國體である。又世界は、一面に何處までも自己表現的に、靜的に、文化的である。藝術と學

問とは、かかる表現の内容である（その相反する兩方向ではあるが）。ここでは永遠に有るものが現れると考へられる。國家的に歴史的世界が形成せられ行くが、文化的にその永遠の内容が顯現せられ行くのである。歴史の時代と云ふのは、文化内容的に劃せられるのである。此の立場に於ては、國家形態そのものも文化現象的に見られるのである。國家形成的には、歴史は因果的である、文化形成的には歴史はメタモルフォーゼ的である。此に政治史と文化史とが對立する。政治の立場からは文化も手段と考へられるが、文化内容なき政治は私慾的であり、方便的である、而して要するにそれは蜚蜚的である。歴史的世界は形相と質料との矛盾的自己同一的に、形が形自身を限定する世界なるが故に、無限なる共存的の世界として、形と形とが相對し、國家と國家とが相對立する。絶對現在の世界は無限なる國家對立の世界である。一々の國家が全體的一的世界の性質を有つて居る。之に反し絶對現在の自己表現として、文化的世界は綜合的に一である、すべてが個性的である。個性的と云ふことは多が一と云ふことである。一つの時代は一つの個性を有つと考へられる。同一のイデアの顯現とも考へられる。藝術と學問とは、絶對現在の自己限定の相反する兩極に於て

見られる表現的内容であるが、一つの時代の學問と藝術との間には、自ら一つの形が働いて居るのである（例へば、ギリシャの藝術と哲學との如く）。

右の如く、絶對現在の世界は、時間的に、空間的に、動的に、靜的に、相反する兩契機を含んで居ると共に、それ自身の自己限定として、矛盾的自己同一的に動靜一如的である。時間即空間、空間即時間的に、すべてが絶對現在の瞬間的自己限定的である、物心一如的である。そこに世界は宗教的である。歴史的世界は宗教的契機を含んで居る。それは世界そのものの成立の立場である。

多と一との矛盾的自己同一として、世界が自己自身を映すことによつて、成立する立場である、世界自覺の立場であるのである。そこでは我々の自己の一々が、世界の個として、一々が絶對的一者の自己表現點となる、一々の個が世界の出立點となるのである。これが世界宗教の立場である。國體は超越即内在、内在即超越的に、世界的世界形成的として、宗教的でなければならぬ。然らざれば、それは道德の根源となることはできない。併し道德は直に宗教的と云ふことではない。民族信仰は直に世界宗教ではない。民族信仰は國體と結合し、國體を基礎附けるが、世界宗教は、世界と結合し、世界を基礎附

けるのである。

今日、多くの人は、國家學と云ふものは、その根柢から考へ直さなければならぬと云ふ。併しそれは如何なる立場から如何に考へ直さるべきと云ふのであるか。從來の國家學は、國家學と云つても、自然科學の型に倣うて一般法則學的であつた。抽象意識的自己の立場から對象論理的に考へられたのである。行爲的自己と云つても、かかる自己の立場を出でなかつた。今日は、かかる立場が深刻に批判せられねばならないのである。歴史的發展の結果、今日かかる物の考へ方は具體的實踐から遊離したものとなつたのである。今日は、歴史的世界自覺の時代である。すべてが歴史哲學の立場から考へ直されなければならない。所謂歴史科學の立場と云ふのは、粗笨なる自然科學の立場たるに過ぎない。歴史的世界の自己形成と云ふのは、形が形自身を形成すると云ふことでなければならない。個と全との矛盾的自己同一として、自己自身を形成する形の立場から考へられるのである。單に環境的に考へられるのではない、單に主體的に考へられるのではない。從來の一部の社會學の如く考へるならば、歴史的形成と云ふものは否定せられなければならない。

然らばと云つて、單なる信念の主張は學問ではない。

私はすべて學問と云ふものは、歴史的世界の概念的自己表現として成立すると考へるのである。論理とは、かかる概念的自己表現の形である。學問の成立するには、その根柢に、我々の自己に行爲的直觀的な、自己自身を形成する形と云ふものがなければならぬ、即ち歴史的身體的なものがなければならぬ。例へば、生物學に就いて云へば、我々の生物的身體的生命的直觀と云ふものが、かかる形であるのである。それが生物的科學の公理となるのである。それは他の形に還元することのできない獨立的なものでなければならぬ。然らざれば、獨立な一科學と云ふものは成立せないのである。無論、生命現象は何處までも化學的に物理的に説明せられるであらう。併しそれには、根柢に生命の直觀的事實がなければならない。生命の行爲的直觀がなければ、生物學と云ふものはない。私は國家學と云ふものに於ても、その成立の根柢には、上に述べた如き意味に於ての國體的直觀と云ふものがなければならぬと考へるものである。然らざれば、一つの獨立的な學問として、國家學と云ふものは成立せないであらう。國家的現象も何處までも社會學的に説明せられるであらう。併しそれは何處までも

社會學に還元することのできない行爲的直觀の事實でなければならぬ。而して絕對現在の自己限定として、歴

た如く、工場は歴史的世界創造の生産場である。

(昭和十九年二月稿)

【附録一】

日本の家族國家的實體は、皇室を宗家と仰ぐやうな諸氏を基礎的なものとして成立した我が國家の古代史に由來すると云はれる。我國家の成立史に於て見るに、異種族異民族の鬭争征服と云ふ如きことなく、それ等が天孫族の下に統一融合して一民族を渾成するに至つた。皇室を宗家と仰ぐ諸氏の結合と、之に歸一する他の諸氏諸民の從屬といふ事實に、上古の家族國家の實體があり、諸氏に從屬した部民の如きも、諸氏の從屬的構成員に外ならなかつたから、古代の氏族國家を家族國家と考へることもできる。かういふ國家が日本の原型であり、後代の發達は之に基礎をおくと云ふ。家を一つの團體として見る時、家について考へられる性質に四つのものがある。一には、家はその成立に於て自然發生的であつて人爲的でない。二には、その構造に於て歸一すべき中心を有つて居る。三には、家はその生活に於て親和を旨とする。四には、家はその生命に於て永遠の將來に互つて存續する。日本の國家が家族國家である以上、かかる屬性が含まれてゐなければならぬと考へられる。國家は法を必

來、我國家は一民族として、今日に至るまで生々發展し來つたのであり、その意味に於て眞に民族的國家と云ふことができ、萬世一系の皇室を基とした國家として、我國家は眞に家族的と云ふことができる。併し私は、我國の國體の精華としてその唯一性は、歴史的世界形成的として、その宗教性、神聖性にあると思ふ。而して、今日世界自覺の時代に於て、それは國家の範を示すものであり、かかる國家概念は國家學の新なる出立點となるものである。私は嘗てかかる立場から、「國家理由の問題」に於て、法の根據について論じた。抽象的な經濟人としての立場からでなく具體的な「國富論」として、經濟學もかかる立場から考へ直さるべきであらう。上にも云つ

要とするが、家族國家は法の根柢に道德を要求し、その道德は親和と共同一體の生活の實現を目的とするものとして、法も家的でなければならぬ。法の法たる所以は、道德の實現になければならぬと考へられる（牧健二博士による）。

右の如き我國の國體觀が、我國體の他に類例のない內面的統一性を表現するものとして、私は之に同意するに吝なるものではない。此に我國體の強さ美しさがあると思ふ。併し私は我國の國體が皇室を諸氏の宗家として家族的と云ふ以上に、我國の肇國が、我國民の信念に於て、天地開闢の神話を背景として、神勅に發したと云ふ點に重きを置きたいと思ふのである。そこに我國體がその成立の根柢に於て歴史的世界形成的であり、世界史的なるものを含んで居ると考へることができると思ふ。そこから絕對現在の自己限定としてすべてが皇室から、すべてが皇室へといふ我國體の精華が出て來るのであらう。我國體は單に宗家的形態を推し進めるだけでなく、之を越えたものがなければならぬ。皇室には宗家と云ふ以上に、次元を異にしたものがなければならぬ。歴史的事實に關することは、その方の専門家の教を乞はねばならぬが、奈良時代から平安朝時代までは、主として宗家的

といふことが考へられたかも知れない。併し一旦幕府と云ふ如きものが成立し、民族的なるものが強盛となつてから、建武中興時代に至つては、之と明に區別せられ、神國といふ意識が強く現れて來たのではないかと思はれる。皇室は民族的主體ではなくして、主體の主體である。我國民が皇室を中心として、種々なる時代の變遷に關らず、維新即復古、復古即維新として、今日まで生々發展し來り、天壤無窮の信念を有する所以は、右の如き國體觀念に基くものであらう。家族的に保守的だと共に、世界史的に進歩的なる所に、我國の國體の特色があるのである。

家族と云ふものの根柢には、血統と云ふものがなければならぬ。そこに家族的と云ふことが自然發生的と考へられる。併し單に自然發生的な團體と云ふことは、生物的とも考へられるのである。家族と云ふものは、その成立の根柢に於て既に宗教的でなければならぬ（社會學者によれば、家族と云ふものが最初の自然的團體ではなくして、寧ろ社會から家族へである）。祖先崇拜なくして家族と云ふものは成立せない。人間的家族成立には、生物的自然的なると共に、之を越えたものがなければならぬ。此故に歴史的形成的として、家族的團體が道德

的と云ふことができるのである。而してそこから法と云ふものも出て来るのである。我國の國體の特色と云ふのは、何處までも內在的として家族的たると共に、何處までも超越的として宗教的たる點にあるのである（公が「おほやけ」と云はれる所以である）。自然的發生的に生むと云ふことは、歴史世界的自然的にと云ふことでなければならぬ。我國では天皇は過去未來を包んだ絕對現在の中心であるのである。故に單に家長的ではなくして、現神と云はれるのである。我國體を神國のと云ふのは、神祕的といふ意義ではなくして、却つて歴史的・世界的形成的として、勝義に於て合理的なるが故である。

我國の國體がその成立發展の歴史に於て、右の如く歴史的・世界的形成の創造的形態として、内に世界形成の原理を藏するが故に、今日それから東亞的世界形成の原理も出て来るのである。八紘爲宇と云ふことも、此から考へられねばならない。

道德の目的を親和と共同一體の生活の實現にあるかに考へ、法をその手段であるかの様に考へるのは、抽象的な主觀的道徳觀に由るものではなからうか。道德の根源には、歴史的・形成的要求がなければならぬ。そこには絕對的に命令的なるもの、法的なるものが含まれて居るのである。我國に於て、詔と云ふものが絕對と考へられる所以である（「國家理

由の問題」參照）。血とか家とかを強調することは、封建的と解せられる恐もあるであらう。